

## 走りつづける

福島県いわき市立平第三中学校

三年 船山 優貴

僕はスタートラインに立つ。苦手な第二レーン。一〇〇メートルを過ぎての合流が心配だ。みんな僕より予選通過タイムは速い。目を閉じ集中をより高めて、深呼吸をし、レースをイメージする。「オン、ユア、マーク：バン」中体連の福島県大会。僕は共通八〇〇メートルに出場した。結果は自己ベストのタイムは出たものの準決勝敗退。力の差を痛感し、僕の中三の夏は終わった。

僕が陸上を始めたのは、小学五年生の頃だ。それまでも走ることは好きで、特に持久走大会の前には、毎晩父と走ったりしていた。家の近くのトラックで陸上教室があると知り、通い始めた。基本的な体の動きや少し長い距離を走った。先頭を走ることが多く、とにかく楽しかった。六年生になると友人の勧めで陸上のスポ少に入部した。ここで僕は本格的な陸上に出合う。公式大会の行われる立派なスタジアムでの練習。箱根駅伝にも出場した優しいコーチ。ブルーのユニフォームやちょっといいシューズ。そして毎月のようにある記録会や大会。週に二回の練習に加え、市の駅伝メンバーに選ばれたこともあり、練習は本格的になったが、不思議と嫌ではなかった。むしろ伸びていくタイムはうれしいものだった。喜

んで走りつづけていた。

父親の仕事の都合で、僕は小学校を二つ、中学校を二つ変わっている。そのたびに、新しいクラス、先生、教科書、友人関係：環境が変化する。僕は人見知りで口下手で、転校のたびに憂うつになった。「ゆっきー速いなあ、陸上のスポ少入りなよ！」五年生の持久走大会。学年二位だった僕に友人が勧めてくれた。僕の僕らしさ、友人たちの僕への評価。「走る」ことは、僕に少しだけ自信を与えてくれていた。それと同時に次々と目標が生まれ、挑戦しつづけることになった。

中学一年の夏、いわき市の中学校へ転校になった。ああまたかあ。これまで以上に友人との別れは辛く、新しい環境への不安はとてつもなく大きかった。「東北大会、いや全中で会おうね！」そう言っ、部活の仲間と別れた。涙が止まらなかった。自暴自棄になりつつ、僕は夏休み中から、早速新しい中学校の陸上部の練習に参加させてもらった。種目は長距離と駅伝。先輩方は、全国でも通用するような猛者で、練習内容も量も、毎日の練習についていくのがやっとで今までとは比べものにならないくらい充実していた。それと同時に僕の少しだけの自信はなくなり、すっかり気後れしてしまっていた。

「全中で入賞！ ジュニア・オリンピック出場！ などという大きな夢ばかり言っていてはダメだ。目標とは今は無理だけど、高すぎず、低すぎず、頑張れば手が届きそうなものであるべきだ。」ある日の顧問の先生の言葉に僕ははっとした。これまで何を目標に、何に向かって挑戦していたのだろうか。この気付きのあと、僕は今の自分を冷静に把握することにした。体力があまりなく、スピードに自信があるから、種目は長距離の中でも短めの八〇〇メートル。新人戦での目標は二分十秒、四位まで入賞し、

県大会へ出場すること。貧血をしつかり治療し、食事や普段の生活も見直し、体づくりをすること。何とか手の届きそうなタイムを設定し、具体的に小さな目標を立てた。そして日々の練習の中でも、一周のペース、一キロのペースを常に意識して走るようにした。すると不思議なことに、毎日の練習の中で目標をクリアできるようになり、気持ちのいい達成感が生まれてきた。自分の立てた小さな目標を確実にクリアする。時には上方修正、下方修正しながら…。

昨日の自分とのたたかい、毎日が挑戦なのだ。今僕は、駅伝大会に向けて苦手な長い距離に挑んでいる。もちろん目標を掲げているが、うまくいかないことも多い、それでもしつかりたすきをつけないで走りつづけていきたい。また、受験という大きな壁、新しい出会いと別れというものも、僕にとって重大な挑戦である。ずっと全力で、というわけにはいかないが、時に休み休み、自分のペースで、僕の人生を走りつづけていきたいと思う。